

Rājatarāṅgiṅī からムガル朝期のペルシア語年代記への歴史情報の伝承をめぐって  
小倉 智史 (京都大学文学研究科西南アジア史学専修)

ムガル朝第三代皇帝 Jalāl al-Dīn Akbar (r. 1556-1605) の命令によって、別宮ファテプル・スィークリーの一角に設けられた宮廷翻訳局 (Maktab ḥāna) では、数多くのサンスクリット語文献がペルシア語に翻訳された。代表的な翻訳文献として Atharvaveda や Mahābhārata を挙げることができるが、他に Kalhaṇa 作 “Rājatarāṅgiṅī” やムスリム王朝時代を生きた三人のバラモン、Jonarāja、Śrīvara、Śuka によって作成されたその続編も “Tārīḥ-i Kaśmīr” という名でペルシア語に翻訳されている。

ムガル朝の宮廷で作成された歴史書である Nizām al-Dīn Aḥmad “Ṭabaqāt-i Akbarī (1594 作成)” や Abū al-Faḍl “Ā’in-i Akbarī (1597-98 頃作成)”、ビージャプールのアーディル・シャーヒー朝の宮廷で作成された歴史書である Firištah “Gulšan-i Ibrāhīmī (1609-10 作成)” にはカシミール史の章が別個に設けられている。また 17 世紀前半には、Anonymous “Bahāristān-i Šāhī (1614 頃作成)” や Ḥaydar Malik Čadūrah “Tārīḥ-i Kaśmīr (1621 頃作成)” といったカシミールの年代記が相次いで作成された。これら一連の歴史書に記されている情報は、上述の Rājatarāṅgiṅī ペルシア語訳に多くの部分で拠ったとされる。このことは従来の研究で度々指摘されてきたが、近年 Slaje が改めて Rājatarāṅgiṅī からムガル朝期のペルシア語年代記への歴史情報の伝承経路を提示した (Slaje, Walter 2005, “Kaschmir im Mittelalter und die Quellen der Geschichtswissenschaft”, *Indo-Iranian Journal* 48,2005,1-70.pp. 47-51.)。

しかしながら、ムガル朝期ペルシア語年代記の中で Rājatarāṅgiṅī ペルシア語訳に拠ったとされる部分にも、オリジナルの Rājatarāṅgiṅī には見られない歴史情報が追加されている箇所が多々存在する。今回の発表では、宮廷翻訳局での翻訳活動や Rājatarāṅgiṅī ペルシア語訳のテキストの特徴、ムガル朝期のペルシア語年代記について概観した後、Rājatarāṅgiṅī の Hoshiarpur 版とムガル朝期のペルシア語年代記の間でテキストが異なる箇所をいくつか取り上げる。そして歴史情報が伝承されてゆく中で、他にどのような文献が参照されて、情報が追加されていったのかを検討する。